

「人材育成で何が必要か」 (2010年1月8日 全国農業新聞掲載)

農業生産法人(有) トップリバー代表取締役

嶋崎 秀樹

農業の人材育成に必要なことを一言で言えば就農者を受け入れ、育成できる組織を全国に構築することである。今農業の人材育成はやっと農業の『明治維新』が始まりつつありチャンスなのだが、受け入れ組織がないため人材が定着・成長できないでいる。

日本の農業は技術面でこそ世界のトップレベルに成長したが、原価計算を考慮した価格、利益、規格など実需者の欲する農産物を作ることすらできない状況であり、農業の3分の2を占めると言われるマネジメント教育も未熟である。もちろんこのような農家を教育する人(組織)すら育てられなかった歴史が存在する。優秀な子供を育てるのに親や先生がいなくてどんな子ども(農家)が育つのか未来の農業が危ぶまれる。農業における人材育成を理解していない人がルールを作ったり、固定概念の塊である行政や農家が語ったのでは人材育成はできない。

もう一つ見方を変えてみると、農業は野菜、米、畜産、果樹、花きなど分野が広く、野菜1つとっても作物、地域、規模、生産者年齢など多様化しており、一言では人材育成は語れない。それを区別、分けず全てを同じ政策にはめこみ、農家を区別することが差別のごとく判断する方々が多いが、本当は農業を間違った平等から解放し、条件別に区別をし、農業従事させることが人材育成に一番必要なことである。

よって農業界の人材育成を確立・成功させるには、組織づくりかつ多様化した人材の受け皿づくりが必要である。そのためには育成事業に十分な予算をつけることがこれからの課題であると提言したい。

真の日本の農業を担う人材を育成しなければ日本の農業は国内外両方から見放されるであろう。それは自給率、農業予算を語る以前に農業の基本の基本であり核である。多くの方が1日でも早くこのことに気づくことを期待したい。